

月面地物の新らしい命名法

関 口 直 甫*

昨年8月の第15回国際天文連合総会では、月面地物の命名法に関する決議が採択された。その内容を以下に紹介し、解説することしよう。引用符の中が決議文の邦訳であり、その間に解説をさしはさむことにする。全文12ヶ条の決議である。

“1. 宇宙機（スペース・ヴィークル）によって得られた豊富なデータは、メードラーにはじまる現在の体系よりも、更に精密で詳細な体系を要求するような月の地図作製の新しいプログラムを可能にした。改訂された体系は Region と Province の幾何学的格子を用いる”。

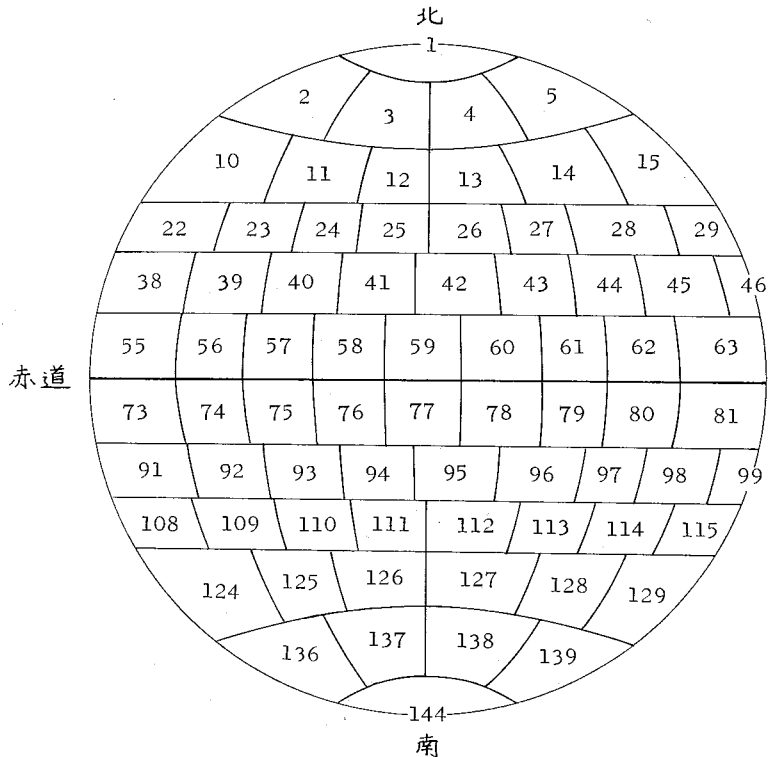
この Region と Province という用語の邦訳をきめることは、私にはあまりにも僭越なことなので、この稿では原語のまま記しておく。しかし筆者は、ある出版物の中で余儀ない立場に追い込まれて、領域および地域という訳をつけておいた。

“2. 新しい体系では、緯度と経度の大きさを、1:1,000,000 の NASA Lunar Aeronautical Chart (LAC) におけるように、144 個の Region に分ける。第1図（詳細については Robert Carter, The Moon を見よ。詳細な参考文献は後記）のおおのの Region は、1:250,000 の NASA Lunar Topographic Orthophotomaps (LTO) のように、16 の Province に分割される。おおのの Province は、その LAC の Region 番号と、そのあとに A, B, C, D と 1, 2, 3, 4 という数字からなる符号表示をもつ。第2図は 39B3 という符号を示している。”

第2図全体が Region で、その16分の1が Province、斜線が 39B3 というわけである。

“3. 標準地図作製作業のために、おおのの Region と Province には、その中に含まれる、目立つ地形（火口であることがのぞましい）の名をつける。Province の名は Region に使ってはならない。”

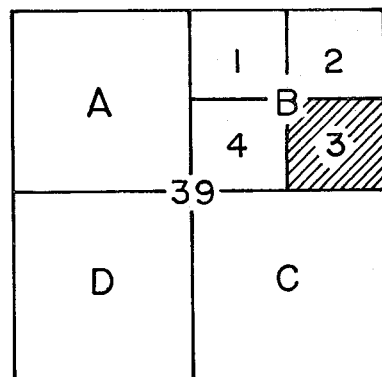
* 東京天文台
N. Sekiguchi; The New Resolutions Concerning Lunar Nomenclature.



第1図 月の可視半面の分割法。裏側の分割法はこれから推定して下さい。

つまり Region と Province は第2項の番号と Province 符号とともに、もう1つの名前をもつのである。

“4. 格子の体系は更にあたえられた Province の中の地形の同定のために使用できる。横座標は大文字 A……Z（OとIは除く）の1つで西から東に向けてつけて行く。縦座標は南から北へ向けて小文字 a……z（oとi



第2図 Province, 39B3 が斜線の部分。

は除く)の1つでつけて行く。”

1つの Province の中で経緯度の線で 24×24 の部分にわけ、たとえば西からかぞえて3番目、南から数えて4番目の区割にある地物は Cd のように名付けられる。これに Province 名をつけて、その地物の名とする。たとえばこれまでアリストアルコス C と呼ばれていた火口は ヴァイサラ Mz という名になるのである。この古い名称の廃止は次の条項で決議されている。

“5. これまで月の地形を示したギリシャ文字は廃止する。またこれまで大文字のローマ字を附した名で示された火口は、新しい特別な名前で漸次命名される。従来の体系と新しいそれとの間の関係を容易にするために、前者は大尺度の地図上に書き込むべきである。適当な時期に、新旧対照表が準備されるであろう。”

これで、今まで月面観測者に親しまれて来た、ライナーなどの名は廃止される。ローマ字を附してあらわした火口は、‘漸次’廃止されるというのは、ある基準以上に顕著な地物には新しい固有名をつけ、それ以外は第4項の方法で命名されることになり、その作業に多少時間がかかるからである。

“6. 高地は一般に新しい名前を要する。今まで名がなかった蛇行稜 (sinuous ridges) は Dorsum (複数は Dorsa) と呼ばれる。Rima (Rimae) (溝) は新しいもっと適当な名がつけられるだろう。火口鎖 (crater chain) は Gatena と呼ばれる。例えば Gatena Davy のように。”

ここでいう名とはラテン語の普通名詞の名で、山脈を Montes, 海を Mare, 入江を Sinus という類である。高地についてはその名称がきまらず、上記の表現となった。Rima については、最近の宇宙機の成果によっていろいろな種類があることが判明したため、一括して Rima とすることができなくなったものである。

“7. ごくわずかな例外を除いては、今までに名付けられた月の命名は、すぐれた故人である科学者の名であったので、今後の命名もまた全世界的に選ばれた人類の文化と知識への故人となった貢献者、たとえば作家、画家、音楽家等の名を命名すべきである。しかしながら、政治家、軍人、宗教家、および現代の哲学者の名は除外される。”

第5項の決議によって今後新たに月の表面(裏側でない面)にかなりの数の命名を行わなくてはならなくなったので、そのための基準を設ける必要が生じたわけである。この決議の表現は、今まで優先的に考えられていた天文学者、特に月研究者は、やや遠慮しようという意味もある。しかし、除外される者を決めたことは面白い。

“8. ある特別な理由によって命名を必要とするような非常に小さい地物は、IAU の承認を受けて国際的なリストの中から、男でも女でも、ファースト・ネームで命

名される。ただし、4個以上の音節をもつ名は除外される。”

ファースト・ネームとは家族名に対する個人名で、男ならジョンとかヘンリーとかポールとかで、女ならアナとかメアリーとかキャサリンとかいう類である。上記の中で最後の文章は、直訳すれば、‘3個以上の音節をもつ名は除外される’と訳すべきだが、英語の表現慣習として3個の音節はよくて4個の音節は除外される、という意味に解釈すべきなので、上記のように意識しておいた。

“9. 特別に研究するとか、サンプルをとって来るとかいう目的のために、アポロ計画では、それぞれの着陸点の近くにある地物に対し名前をつけて来た。その追加のリストは、ワーキング・グループによって修正され、改訂された。IAU は、この種のリストは今後は前もって報告することを要求する。”

この文章の中で修正というのは誤っている所を直されること、改訂とは誤っていないのだけれども、ワーキング・グループにとって気に入らない点を変更されたことを意味する。この条項はアポロ計画のこの問題をみせしめのためお仕置をして、IAU の命名についての優先権を宣言したものらしい。

“10. 1970年のリストにいくつかの訂正が寄せられている。このリストは1970年 IAU 総会のすぐあとで亡くなった M. Minnaert の名を含んでいる。ワーキング・グループはとりあえず Minnaert という名を、月の南半球の大きな無名火口に命名しておいた。”

この火口は裏側であって、地球からは見えない。

“11. とりあえず、Province の名としてつけておく火口の名のリストが報告されている。その名の横の欄には、その Province の符号表示、その火口の現在の体系による古い名前、(もしそれとちがうならば)新しい名前および位置がリストされている。このリストには、Abbot (Charles J.) という名前をふくんでいるが、その人は生存者である。その人はただ1人生き残っている IAU の創立当時の会員であって、その100年目の誕生日を記念して、ワーキング・グループによって特別に命名されたものである。”

月面火口の命名には、生存者はつけない、という原則がある。今までの例外は、宇宙飛行士だけであったが、第2の例外としてこの命名を行ったものである。

Province の名の例として、たとえば符号表示で 61C2 という Province は現行名としてタルンチウス C 火口の名が付き、この火口はキャメロンと名がかわった。この火口の経度は +45.9度、緯度は +06.3度である。

“12. さらに、今後作られつつある LTO シリーズの地図、およびいろいろな他の地形に利用できる名前の当

面のリストが報告されている。”

つまり第5条の規定で、これまでローマ字大文字づきであらわされていた火口のうち、顕著なものには固有名がつけられることになったので、その命名に利用されるような名は、あらかじめリストを作っておこうというわけである。その表のはじめから数個を紹介すると、バック、エルマー、フオックス、ヘルマート……というような名が並んでいる。恐らく作家とか画家、音楽家と言う人物なのだろう。

以上が決議文の全文であるが、多少補足的説明をする、Region No. 1 と 144 とは、それぞれ北極および南極の円形の領域であって、これを16のProvinceに分割する仕方は、次の総会までに研究するとのことである。

この決議案を見ると、いかにも NASA の LTO の方

式の押しつけ、という感がなくもない。ことに、ソビエトの研究者からは相当強い反対が出そうに感じられるが、この総会では第17委員会(月)にはソビエトからの出席者は一人もなく、最後の採決では第17委員会の中の反対はなかった。

LTO は完成すれば、1:250,000 の地図だけで総計2304枚、重量はネットで75kgに達し、制作に要する作業量は44人・年となる。方法はルナー・オービターからの写真測量であるが、この総会の時点では、赤道近い小部分しか撮影が終っていない。完成までに数年かかる見込みである。

なお、第2項の決議文中に、“詳細な参考文献は後記”という文章があるが、総会の席上ではこの文献表は配布されなかった。

新刊紹介

星三百六十五夜

野尻抱影著

(恒星社厚生閣、B6判、384頁、1500円)

これは抱影先生の数多い星の随筆集の中でも異色の作品である。1年365日に次々と星空の推移があるが、それと同時に人間の地上の生活の変化がある。昔の日本人はこの季節の推移の微妙な変化までを「季感」としてとらえ、短詩形である俳句に「宇宙の現象」をよみこむには季感を示す「季語」に最大の重要性をおいた。

抱影先生が、この本の形を横長の「俳句歳時記」風にしたのもそのような微妙な感覚の表現に最適な形式と感じられたからであろう。

1月1日は元朝の明星で、鬼貫の「春立つや、星の中から松の色」の句がちりばめられる。そして或る日、ある時に眺めた星の印象が、あるいは淡々と、あるいは熱っぽく語られる中に、中国、ギリシャ、ローマ、あるいはヨーロッパの詩人たちの「星の讃歌」がちりばめられる。あるときは戦前の銀座の空の歌舞伎座の大屋根の上に輝くシリウスがあり、そのシリウスが頁を繰ると桜並木の夜桜の彼方にかたむき、そして北斗が登場する。

夏の糸魚川の砂浜、よしづ囲いの小屋の旅芝居、そのよしづの外の青黒い海と青白く光る夜光虫、その上に輝く天の川、それが何十年も前の風景でありながら、つい昨日の出来事のようにあざやかに描写される。若い頃すごされた甲府の中学の宿直の夜の校庭で、星と共にレンズにとられた南アルプスの山嶺も美しい。修学旅行の前夜「靴下の破れをつづって」深夜に見渡した星空に新星を発見した女学生の「靴下星」というほほえましいエピソード

も、またさまざまな「日本の星名」の考証もある。ある頁からは「今しも双子座に近くオリオンの昇るを見よ。……」とローマの詩人マニリウスと近づきになれるし、また「天もし酒を愛せざれば、酒星天にあらじ。地もし酒を愛せざれば、地まさに酒泉なからむ。」と唐の詩人李白と共に春の夜の海蛇座の「酒星」を指さすことができる。あるいは建礼門院右京大夫と共に「あさぎ色なる(空)に光ことごとしき星の大きながむらもなく出でたる、なめならずおもしろく……」と江州坂本の初冬の星空に感激する。

このような星空への興味と愛情は行住坐臥の生活のしばしにもあらわれており、抱影先生自身も12月19日の項に「自分のことをいえば、少年の頃ふと星に親しんでから六十余年はいつの間にか過ぎてしまったが、人生行路の険しい山坂を登りつ降りつする道伴れに、いつも星がないことはなかった。夜はもとより、眼を閉じれば昼もである。そしてこちらに求める心さえあれば、星ほど雄弁なものはない。大自然に共通な言葉——光と瞬きとで、いつも話しかけてくれる」と述懐しておられる。

365頁をそれぞれちがった星の話題で埋めるのは決して容易な業ではないが、それを可能にしたのは抱影先生の深遠該博な学殖と、そしてはげしい星への愛情・詩魂であると思う。多くの人によんでもらいたいという気持ちの反面、ひそかに筐底にかくしおいて、香り高いブランドのように一頁また一頁と愉しみひろげるべき本であると思う。ましてや、書評のために読みそぐ類の本では絶対でない。1955年に野間仁根画伯の星座絵で装られた豪華本は貧書生の手の届く値段ではなく、数軒の本屋で立読みして読了したが、今回手頃な価格の愛蔵版が刊行されたのはまことに慶賀に耐えない。ますますの御健筆を祈る次第である。(石田五郎)